

新局玉石童子訓

卷十九



一遠13  
1279  
34



1279  
34

# 病

## 新局玉石童子訓卷之十九

東都 曲亭主人人口授編次

### 第四十九回

野上驛の悪僕悪主と賺と  
立合阪の仁人孝女と憐ぶ  
却説多賀典膳政朝の高嶋一口の両主客の今日君邊の云云  
と悄悄地告て又いさ。我君不明の在ねも古語のいふや。黄忠は蘭殿から  
まきとれ。秋風是と破り。良月明らまきとれ。浮雲是を掩ふ。見  
内。窓井の方の狐媚あり。外。曾根見の便侮あり。君威と借て私情を  
行ひ賢良と誣て不忠とま。あどと。危殃蕭牆の中。か。も。起らる。こと。い。ど。  
然る。猶。幸。小。長。橋。象。船。の。忠。あり。義。あり。宗。玄。頭。顛。と。喪。ひ。し。る。君。臣。  
無明の酔醒て。玉石亮然る。も。も。も。臣。の。折。と。ひ。て。竊。や。う。小。諷。諫。の。詞。を。

五石童子訓卷之十九

壹

曲亭主人

聲一稟者。我が君御後悔の色見を。明日の夙めて正廳へ訴入。召集合々。邪正と判断。去りとて仰合されりければ。跡御前を退出。宿所へこそ路の程。這里も亦事ありとて。罵走る下司ありとて。呼留めて。問詰る。其事詳々。私ども曾根見健宗の云云と。その大畧を知。足る。非理奸虐の緝捕。あらんを。開か儘。いんさまで。立ち見。果て事あり。主人危ふかりけん。我より先。一口の資助。あろう。吾人毎。矢庭へ搦捕。しおけん。實公私の幸なり。所以。あそりけん。いんさ。と。問詰る。好純然。い御。曾根見伍六健宗。が隊兵。尋く。従へ。我。好純を。理不盡。搦捕。ま。あ。り。と。一家。見る。奴婢。毎。荆妻。不。従。之。香。華。院。へ。赴。然。ら。ぬ。使。女。充。ら。れ。て。左。右。の。技。助。の。あ。ら。う。我。身。單。り。と。彼。徒。を。中。る。儘。せ。て。投。伏。々。々。當。人。曾。根。見。健。宗。と。矢。庭。の。膝。組。

布。曾根見の雜兵。懲む。ま。小。蒐。る。を。防。ぐ。升。が。程。小。健。宗。短。刀。を。拔。け。我。太。股。と。刺。き。か。反。復。され。と。思。ふ。ら。り。小。腰。刀。と。り。健。宗。の。利。を。曾。賀。子。へ。縫。留。る。折。も。よ。く。一。口。の。資。助。あ。ら。う。と。て。吾。人。毎。送。り。搦。捕。れ。ら。有。恣。一。程。小。荆。婦。も。老。僕。若。黨。奴。隸。も。皆。か。ら。あ。て。便宜。と。ゆ。え。先。家。傳。の。仙。丹。と。り。我。身。の。金。瘡。と。療。治。さ。る。鬼。大。夫。主。の。薦。め。あ。ら。う。と。敢。刀。瘡。と。厭。ふ。と。る。目。今。衣。裳。と。更。め。て。出。訴。せ。ま。思。ふ。折。ら。計。ら。貴。老。の。問。れ。ら。り。と。彼。君。邊。の。秘。事。を。又。承。り。ぬ。一。期。の。然。は。是。小。優。ま。者。の。ひ。と。と。一。五。十。と。説。示。せ。鬼。大。夫。も。亦。恭。一。く。政。朝。ふ。ら。向。ひ。て。在。下。益。々。茲。小。來。て。健。宗。等。を。搦。捕。し。首。の。箇。様。々。と。と。右。目。小。可。平。と。り。七。鹿。山。の。一。椿。事。と。告。ぐ。告。め。と。され。り。又。宗。宗。の。隊。兵。等。の。彼。山。も。免。れ。ま。す。訴。の。事。の。趣。又。伍。六。健。宗。が。兄。の。伙。兵。と。映。



程不其詰朝佐々木彈正大弼高頼主老黨有司と從へる正廳小出  
 坐あり一か家臣賀賀典膳政朝市井司一口鬼大夫安倍常奉り之訴人  
 高嶋石見众好純以下曾根見五郎平宗玄の残兵と罪人曾根見五  
 六郎健宗等局の内召集合て事の邪正と判断を是より先昨日鹿  
 山實檢使遣され有司かるを彼山の為体と報稟すとすゆふ  
 訴人等の稟と趣と異らむ宗玄以下當坐命と損あり者の亡殿と  
 豺狼ると小吠れるもの或は山脚へ滾落て半死半生るの技は像  
 うち来て夫役小昇甘々少るもの他長橋倭太郎勢泰象船弄  
 弥知量等彼身千仞の谷へ落て死活と知りむとすえ其亡殿と稟ぬ  
 秘るいとを稟ける間話休題當下高嶋石見众の家僕宇六可平が  
 稟と趣を照据とて七鹿山の條々と寫し一通を口王園と鬼大夫是と

受取て聲高やう讀訖れが政朝を膝と找めて階下へ侍る宗玄の  
 残兵もうち向ひて汝等との頭人なる宗玄の俱とてくとも彼山到りて  
 長橋倭太郎象船弄弥の問答よりて大畧の事の邪正を知りてん  
 叨小四箇の善少年をも擄捕らむ欲せし故も毛を吹たて疵と求めふ  
 ありやの受甚麻と譴問へ残兵等の蹶然と頭を低て答る者あり  
 开が中の一箇の老兵あり姑且して陳ぶるや小可も性愚きて理非小間  
 事小敏らむ宗玄の所便是守の御説ふとと思ひつけむ善悪  
 邪正と訂問ふ暇もあらむ長橋象船にけら大江峰張と殺らふ少  
 年をも擄捕らむ欲しう後悔臍と噬とも甲斐する只恩免と願ふ  
 のこと及びその餘の残兵も異口同容を陳つけ當下賀政朝の局の  
 内小章居らむる罪人等を召とせむとせれ曾根見五六郎健宗大胆



中六當所帶と没官して墓碑と建ると許さべからば又曾根見  
 宗玄小従ふて七鹿山赴ける彼隊の走卒等も疎忽の罪ありと云ふ  
 曩小宗玄小隸られて彼も小従ふ身中あれが善悪共其頭人の墮意  
 せむのあべうん是を以て罪一層と相宥く。今よりの後夫役小做し。同  
 ちく時るく使ふ。就中曾根見伍六郎健宗其罪饒さむが兵の  
 くら猶頑童中て大人小あらは知亦彼身痛瘡と負ぬといひ。その従兵  
 と共侶小姑且獄舎小敷糸在せと其瘡平愈たらん時左中右も  
 仍ひて人小るても。今高嶋好純の訴言依る。彼大江杜四郎成勝峯  
 張茶六郎通能の出處正し者るる。我思ひ愆らて倭太郎兼弥と討  
 手とて。悄地小彼山小遣ふと。千番悔も及びざら。典膳石見成等  
 此の意とて。異日他者小往方と知り。いので此の義を傳ふか。と課せむ

躬身と起し。二の近習と従ふ。徐小奥へ退り。い。是日の驪果小  
 けり。小程小窓井の方。両箇の弟宗玄健宗が正る事と做せり。も  
 宗玄七鹿山中。戦殺の喧えあり。刺伍六健宗。兄宗玄も弥増せ  
 る。狼藉の罪免る方なく。躬死刑小處せられんと。人の噂と生憎。洩  
 せし。胸潰して。泣きくも哀。この遺滞るけし。左中右。君道違ふ  
 人。えとく。悄地小此の義と。うら歎。弟健宗の為小も。恩赦の罰  
 定とて。稟まののうら。高頼小をり。色小弱る。闇君小あらざれば。嚮小  
 賀政朝の諫言と聽し。より。既小昨非と知り。た。婦言と容。小  
 念さる。而已。然。とて。楊大真の馬塊小。夢の覚。小。あ。ね。事。の。極。小  
 慰め。く。い。ふ。も。あ。て。健宗と赦免せと。思。小。程。小。幼。莫。二十。日。有。餘。小。歴。て  
 彼身の金瘡餘波も。瘡り果。と。比。有。一。日。賀政朝。同。僚

かの麻井我毛の老黨と共侶不出仕あて高頼主不稟をかう曾根  
 見佐六郎健宗の禁獄久き作りひひぬ又蝨く首と切させ士民示し  
 める乱臣賊子法度を文をりて君父を凌ぐ至るらん法度の君の立  
 る所君先是と破りて後不民其法度を破らざるらん在昔孔子の魯國に  
 相する繞一箇の少正卯と誅して鄰國境を犯さるる國治り民泰かりと  
 公の君の知召と所のいふ勸善懲惡の御制度とを願ひけと  
 憚る色もる稟をうら高頼勃然と眼と睨りて開ちいふ追もる  
 我も亦始より思ひさるふあらねども彼曾根見健宗の尚乳臭死頑童  
 世の男子たる者の年十八九に至るともいふ額髪と剃除を移る旨正を女  
 子に擬へて罪ありとも刑を加へ是今の世の通法とて健宗を追  
 放せむやと思ふは女老の髪をあらゆると論貌る似而非仁義を政朝

推返して又稟をうら御説畏ういども健宗少年多きとて死罪一  
 等と宥免ある長橋倭太郎象船并跡も亦額髪ある者あて俱に  
 少年よりけり君の御意に従ひまらるる驕臣曾根見宗を擧げ捕り  
 ちを罪を以て彼自殺を憐れあつて他若く後と立へるも墓石も饒さ  
 ざと掟ゆいと思ひまらるる健宗勢泰長橋と知量象船も皆相似る少  
 年をも一人の驕慢二人の忠義善惡邪正分明るらん賞罰同ト  
 かくもあつて國民並て訝りて見以肩の御制度と稟をうらん是臣  
 等が君の御為に恐れ思ふ所ふとと理りを演て諫へ高頼をうら差  
 たる色あり權且して仰さるる曲膳の意見宜ふ以所あり我彼勢泰知  
 量のふを忘れり因る今亦是を思ふ健宗の狼藉は兄宗全の社死の  
 故あり勢泰知量の乱妨は善ふ與して奸を鋤く義烈といふられもせ





三石山三言卷十九

八

大入美...

小せら太



唐二を害し  
て伍六郎小雪  
太を伴ふ  
あつた  
ごうらうにせら  
よま  
あつた  
見えしり

三石山三言卷十九

三石山三言卷十九

小せら太

小せら太



けり。あの奉。忠臣賀政朝の計る所蓋力ありといひ。同話休題余  
 程小窓井の方ハ屢使君よりち歎れて舍弟曾根見健宗の死刑を赦  
 ひ給れども一霎時留め置まざりて是日追放の夢ありしかば開去向を  
 資助んそ。腹心の内入るりける。基床唐二と喚做ま者小機密を明か  
 治させ。健宗小贈遣ま金二百兩と短刀一口。衣一襲を齎して他が迹  
 とを逐せける。健宗いままの美を知らず同惡の殘兵等と共侶一口の隊  
 兵小追立ちまて城の郊外東のか二三重可る申明亭にて並そ各放  
 せらま一突口蟻子房を破り像く或ハ西或ハ東己が隨意るりて也  
 迹中軍健宗の惘然とて立在るおろろ日景ハ散けとも身を牢衣  
 のまほして今より後の盤纏小做ま死鏢一文もあるとるけまばいふせま  
 と思難て有斯時中馮心氣る同惡人等の己が自恣立別れ背影を

然一げ目送り果々。ち吐きあり程前面よりあて来る者有けり是  
 則別人らむ窓井の方小馮まて密使小立れる彼基床唐二近づく  
 隨ハ聲を低めて伍六主恙在まや。這回和君の不造化ハ悔思ふも是  
 非小及びむ然れども猶幸小死姉君の在ま甲斐小首と續まりのま  
 らむ情地小去向を資んと。咱等と使小をされり。是方へと先小立  
 俱小樹蔭小退れ。背小ある袂裏と懐く解下して懐より一包の  
 金子と會出く遞與ま。健宗ハ死出之途より六道能化の地獄苦  
 薩の引接小逢ふ心地せる。その歡び大なるを満面笑れて幾遍とる。先  
 唐二と勞ひて航其金子と數も見る小正小是圓金五十枚ありけり。唐  
 井の方の贈り。二百兩りけり。唐二不良の猛意のて其半分を掠  
 會りて五十金ハ他を懐ふあり。健宗のま是を知らず件の金子を受載て

故の如く紙小包み。犢鼻禪衣結着。袱裏を開け見ると短  
 刀一口と仁田山細の夾衣二領と帯と汗衫と脛衣鼻紙あり。  
 其鼻紙の間に窓井の方の密書あり。唐二素より是を知らず健宗  
 心とある。衣を脱更んとす。その件の密書の頭れ必と健宗早く合揚て  
 封皮を折れ讀見ると上野の小母君の書あり。其一通も卷入  
 奥あり健宗の讀果て巻返り其書二通を先懐入推容て勃然と  
 聲高申す。やれ唐二は欺て我姉よりとせ。金一百両を金  
 半分に推隱して知らぬ。親も胆の太さ。其の喫つて疾くせ。とら  
 唐二の驚とある。毫も怯まぬ。冷笑ひて。開る何をいふや。彼方さ  
 より受合りて。とら。這里へと来。金子の五十兩より外ある。といせ。も  
 果ぞ疾視て。黙も盗見論より證據我女兄の密書はあり。といひ

懐より合出。是は听ね。短刀の上野の。小父君の紀念をか。夾衣も  
 ごと添て黄金百両あり。と寫示さ。と知らざるや。かくま。正し  
 照る。争へ。と。饒えや。詩も語も没ら。疾出。最も緊。謹  
 ら。唐二の口を閉せ。それ。と。辟易。と。逃。と。背。と。  
 短刀晃りと引抜。潑せ。被。の。精銳。唐二の右の肩尖より。七九。命  
 ま。斫下。と。一聲。苦と叫び。果も仰。反。付。れて。死。で。け。當。下。一。箇。の  
 賤男子も。年。齡。の。二十。小。足。ら。む。面。白。く。月。額。黒。く。身。材。低。く。骨。立。ち。り。ら。  
 今。日。這。里。中。追。放。され。其。一。人。と。い。ひ。の。中。も。ある。半。衣。の。裳。端。折。て。  
 東の方より。か。り。も。健宗の後方。立。て。事。の。光。景。を。見。ひ。ひ。と。堀。馬。に。せ。ん。  
 我。近。に。死。腰。挟。と。一。拭。を。ぬ。健宗が。血。刀。の。鏝。下。より。刀。尖。を。佐。と  
 押。拭。ふ。夫。夫。の。魂。健宗も。亦。介。る。者。な。れ。訝。り。ら。聲。も。被。け。心



所用あり。大刀の我挿副のせん中刀の汝腰あせ。這頭人歩締ふま。既  
 黄昏近けれども。外目の関の料まがら。那里見ぬは十字堂。身  
 装と宿りを求めん疾めせま。疾々と宿の小雪太あり。唐二は  
 刀と健宗は遞與して。其中刀と己が腰あせさく。去向のまご定めね  
 とも。小倉博の路遠に帯さ衣。又利合りて。推圍め。腋腋抱はて  
 率とむるの悪主僕が。一霎時四下と見か。りて。二三町東る。十字堂  
 赴は。俱小衣と脱更る。小雪太のて来ぬ。唐二の衣の肩夫より。背まを  
 斫裂る。裏中の鮮血塗ま。ま。この儘あて。破て。宿の男。女。怪めら  
 さん。のふせま。と思難て。心とも。其頭と見る。お。四月の下。幹る。れ。  
 圍垣の下。花。開。乱。蔓。茨。ヨ。ク。あり。小雪太。は。足。究。竟。と。その。刺。と。お  
 合。り。て。破。り。衣。と。表。布。を。る。絨。合。り。俱。小。衣。を。身。装。と。整。へ。脱。捨。る。

牢衣の亦賣ら。些むりの。後ある。宛めんと。健宗の。指揮。ま。ま。  
 小雪太。既。の。意。あり。軀。面。箇。の。牢。衣。と。唐。二。の。て。来。る。袂。推。裏。ま。ま。  
 背。小。駝。を。行。李。の。像。く。作。為。る。主。僕。の。て。く。立。出。る。も。この。ま。ま。遠。く。  
 既。あ。ま。て。日。の。暮。か。途。中。煮。火。を。買。と。り。て。猶。も。連。り。小。走。り。當。晚。爰  
 中。の。比。及。無。名。村。で。宿。を。求。め。て。俱。小。枕。小。就。は。け。其。次。の。日。未。明。より。酷  
 く。雨。あり。か。が。主。僕。の。物。怪。の。福。入。と。件。の。客。店。小。留。留。是。日。小。雪。太。の  
 宿。の。炊。妻。針。を。借。り。糸。と。求。め。る。刀。迹。ある。唐。二。の。衣。も。自。綴。り。ま。ま。  
 血。小。際。る。裡。衣。汗。衫。と。情。地。小。洗。果。して。身。の。皮。好。と。ち。笑。け。る。  
 小。程。五。六。健。宗。の。逆。旅。主。人。小。誂。へ。本。村。小。在。り。と。小。雪。太。見。て。口。を。き。て。  
 彼。身。の。ゆ。ら。ん。小。雪。太。も。月。額。と。刺。せ。結。髪。を。尋。て。昔。く。旅。客。小。成。成。成。  
 たる。意。税。は。病。と。の。言。小。雪。太。も。あ。ら。驕。り。て。亦。復。逆。旅。主。人。小。誂。せ。る。酒。散。と。

買まらぬ圓金一枚投與へて歌妓あるやと諺る小這里の介する者も  
 とのほど猶飽ぬ心地ある主僕只得相酌ふ終日酔を盡し程小間も  
 時々使用する宿婢の困り嘆へども後出でて先を身邊小人在らざるや  
 時小雪太の聲を低めて是より郎君の身盤纏小富めども今より投てゆ  
 方るる廻國せんも妙るるも這其甚麼と請問を健宗の少あ其頭  
 脱落あるや汝も告され心許る思えけ上野國甘樂郡部領の  
 莊小我小母ありその小母の獨子る鑄野郡司の豪家也半郡三莊の  
 主るれば必那里のねと我女兄の指揮を隨即小母公贈る召父の書  
 翰茲小在り勿論鑄野郡司のあらん小母と父とも路遠ければ對面せざ  
 るものら這回我女兄の賜りたる短刀の上野る小母夫の世を去り一時  
 像見るとと贈らしたる一口見せしめおらせ疑るとさるる教示

筆の跡拙るからぬと豫より小母公の認りて在まれば憐むる正し  
 證據ある我身那里落就る郡司小乞て汝を侍品小做し給せん  
 何もの為小廻國せんやとむむと小喜悦小勝を開る亦妙え最愛と  
 去然らば壽延まわらん今一度過ぬねと酔の釐る虻蜂の回るを  
 酒盃の果の送ふ酔臥す日の暮るるも知らざりける其次の日天快晴れて薄  
 暑路も小宜け且曾根見健宗其詰朝小喜太を將て旅店を去  
 上野へと赴く素よりいそ敷旅るる路の次の好も及れも神社佛閣名  
 所舊迹有と一歩け立よて要る脚と費を程小長日るる三四日  
 経る稍美濃路小入りより是日野上の驛まで來おけり在昔這頭退  
 途人不知らざる然も風流の藪澤るりけん名娼名妓るるあらし世時  
 野上の花子の詞小夏果る扇と秋の白露とむむ先小おのの床

五石童子言卷十六 文源堂藏





都て搔攪カキマゼひて袱包フクロを搭セ駝カ々カ。亦モ兩ニ刀ヲと腰ヲ帶ヒて簷エ廊ハるル雨ノ戸ノ  
 一枚ヒトと推オシ開キつ下シ立ツ。其ソノ庭ニ門ヨリ潛カズ出ス。東ヲ投ゲて走リ去ル。短ミ夜ノ身ヲ  
 けり。健ケン宗ノ其ソノ敵ヲ妓ヲも醉シやう睡ネ端ヲるル。夢ヲも是レと知ラざりけり。余ハ  
 程ハ小コ雪セツ太タイの連リ路ヲと走リ。二ニ四シ里リもぬりんと思ハふ。程ハ明メイ六ロクの鐘ノ音ヲ  
 聞キて。星ノ光ヲも落クるル時ノ候ノ前ノ面ヲより來リぬ。一ヒト箇ノ大ダイ漢カン奴ヲも。廣ヒロ袖スエも  
 襪ワキ禮レ衣イ被キて。巾ツ拭キりて頬ヲ罩カるル。面ヲ色ヲ凄シトカりけり。小コ雪セツ太タイの透ス見ミて。怪ケ  
 有ルるル奴ヲかゝるル。思ハふル。路ヲ狭セけしニ避マるル由ヲも。仍モ違チふ時ノ那ノ大ダイ漢カン奴ヲも。  
 脚ヲを飛ヒして小コ雪セツ太タイの腋ヲ肚ヲを撲ツ地ヲと踉レ跔レ。何ノ久ク躊チウ躇ジュるル。小コ雪セツ太タイの  
 苦クと叫コびも果トむル身ヲと輾レして仆レれけり。當ノ下ノ件ノ大ダイ漢カン奴ヲも。小コ雪セツ太タイの懷ヲ  
 搔カ撈ラりし財ヲ囊ヲるル。金ヲ子ヲと速ク手ヲ抓ツと出ス。懷ヲもも四シ下ノと見ミぬ。亦モ兩ニ  
 刀ヲと奪ト取リて己ノ腰ヲ佩ヒ做シ。袱ヲ包ヲハ開キが隨ヒ奪ト取リて背ヲ駝カへし飽ムとも衣ヲと

剥ハんともあつたり。馬ノ鈴ノ音ヲ近クゆきて。這ク方ノ來ルべし思ハふル。大ダイ漢カン奴ノ驚ヲ  
 慌ワるル。剥ハもも果トむル。岐ノ路ヲ走リともあらはりしけり。話ヲ分ク兩ノ頭ヲ于テ茲ニ復ス。大ダイ江ノ杜ノ  
 四シ郎ノ成ニ勝ニ。峯ノ張ノ茶ノ六ノ郎ノ通ニ能ニ。曩ノ江ノ濃ノの境ヲも。長ノ橋ノ象ノ船ノの兩ノ少ノ  
 年ノ別ノ別ノともあつたり。鬼ノくて水ヲ鷲ヲ其ノ又ク。信ノ濃ノ路ヲと過ル。程ハ岐ノ岨ノ通ニ能ニの父ノ  
 けり。九ノ四ノ藏ノ通ニ世ニの舊ノ里ヲも。今ハ木ノ曾ノ生ノの居ノ城ヲも。既ハ許ノ許ノの歳ノ月ノ  
 歴シて。故ノ舊ノ親ノ族ノ鬼ノ籍ノ入リぬ。訪シふルも相ノ識ノあるル。適ニ其ノ故ノ香ノ華ノ院ノ  
 中ニ我ノ先ノ祖ノの墓ノ基ヲも。豫シても心ヲ當ル。其ノ山ノ院ノの語ヲ誦シて。成ニ勝ニと  
 共ニ侶ニ。住ノ持ノの法ノ師ノの對ニ面ヲも。由ノ緒ヲと告シげ。宿ノ意ヲと演シて。峯ノ張ノ生ノは先ノ  
 靈ノの為ニ。永ノ年ノ不ノ朽ノの墓ノ所ノ料ヲと寄シ進シ。且モ追ヒ薦ノの讀ニ經ニ又モ誦シけり。  
 其ノ布ヲ施シも亦モ淺クくも住ノ持ノの法ノ師ノ飲シ養シて。茶ヲと薦シめ。衆ノをも誦シて。其ノ主ノ僕ノ  
 歎シ待シ。件ノの法ノは。延シ果シるル。口ノ管ヲ留メて。己ノ成ニ勝ニも。通ニ能ニの去ノ向ヲを





